

自然保育



柳瀬恒男

「自然の中で豊かに育つ」をスローガンに一九六六年四月、北本みなみ幼稚園を開園して二十一年を経過致しました。

人間が自然に調和して生活していくためには、幼い時から自然に関心を持ち、身近な自然の風景や動植物等に触れたり観察したり自然と関わり、遊びを通して五感に感じ、味わうことの出来るような生き生きとした活動が望まれる訳であります。

こども達は自然の事象に興味や関心を持って、不思議

に思ったことは自分から触れたり、試したり、扱ったりして積極的に関わろうとします。それらの色々な経験や活動、遊びを通して、思考力や学習する基礎を培うような環境作りに私たちは（保育者は）取り組んでいるところであります。

この幼稚園の概要を述べたいと思います。埼玉県北本市の略々中央に位置して、

敷地面積 九九四四㎡（約三〇〇〇坪強）

園舎面積 一〇八三㎡

園児数 三六七名

教職員数 二二名

によって構成され、園庭の一部には武蔵野の面影を残す自然林があり、春の新緑の頃は一幅の絵を思わせるような萌黄色の見事な自然園、森の幼稚園であります。更に幼稚園から三キロメートル程離れた地域に幼稚園のごども体験農場として、一四八五〇㎡（約四五〇〇坪）が畑地、果樹園、牧草地、水辺の三か所に分散し、自然教育園舎には、ロバ、羊、山羊、孔雀、兎が飼育されてこと

もの園外保育の拠点として活用されています。

この地区は北本市のふるさと、自然遊歩道約三キロメートルが整備されており、埼玉自然百選の第一位に選ばれ俄に脚光を浴びている自然景観に恵まれた所です。

昨春秋に、県立自然観察公園（面積約四三ヘクタール）に指定されるとの説明がなされた地域で、本年五月十四日には「全国野鳥保護のつどい」が埼玉県で開催されます。

その早朝探鳥会には「全国野鳥保護連盟総裁」であられる常陸宮殿下並びに妃殿下の御出席が予定されているなど、都市近郊としては自然の形態がそのまま残っている数少ない地域として注目されている所であります。

幼稚園の四季と自然の関わりを述べてみましょう。

四月、園庭の花壇には年長児が昨秋植え付けた色とりどりのチューリップが咲いて、新入児を暖かく迎えてくれます。年長児は自然教育園近くの桜提に進級祝いを兼ねてお花見の園外保育が恒例です。

五月、新緑の園外保育は遊歩道の水辺にオタマジャク

シすくいに大わらわ。手足も衣服も泥んこ、どんどん池の中に入って、ぬるっとした土の感触に大満足。観察ケースには、オタマジャクシの他、野の花、てんとう虫等の獲物で一杯の大喜び。クラスのケースも賑やかになります。家に持ち帰ったオタマジャクシは、どうなったでしょう。

遊歩道を暫く進んで幼稚園のレンゲ草畑に花摘みに到着する。「ウワァーキレイ、お母さんに見せてあげるの」とピンク色の花束を手に手に微笑むこども達、トントウ虫も見つけた得意そうなE君、みんな幸せそうな園外保育です。

六月、緑したたる遊歩道の森林浴は、こどもたちに優しい心と自由感を満喫させてくれるにちがいありません。

また自然教育園の小梅畑では、青い葉っぱの陰に小梅を見つけ、こども達は木の下にもぐって大歓声、たちまち籠の中は一杯。園に帰ってから、よく洗い砂糖と混ぜ合わせて梅シロップの出来あがるのを楽しみに待ちま

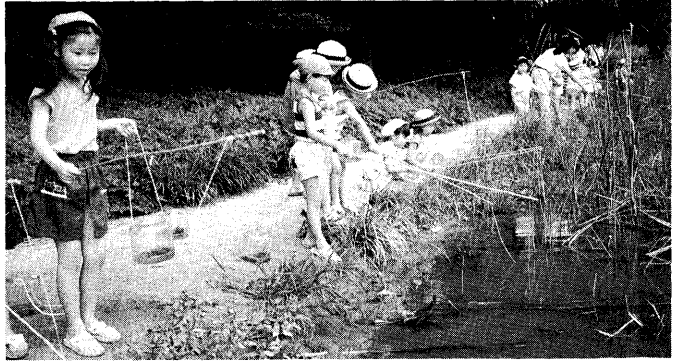
す。これは二学期のレストランごっこでのご馳走になりました。サクランボも真赤にきれいに熟した高い枝に教師が挑戦し、こども達は落ちたサクランボを拾い集め、みんなで洗って食べて、おいしいね、の笑顔がこぼれます。

じゃがいも掘り。自然教育園のじゃがいも掘り、「あ、あった、あった」とこども達は土と汗にまみれて、懸命に掘り取り、今夜のお料理が楽しみとばかりに大張り切りである。

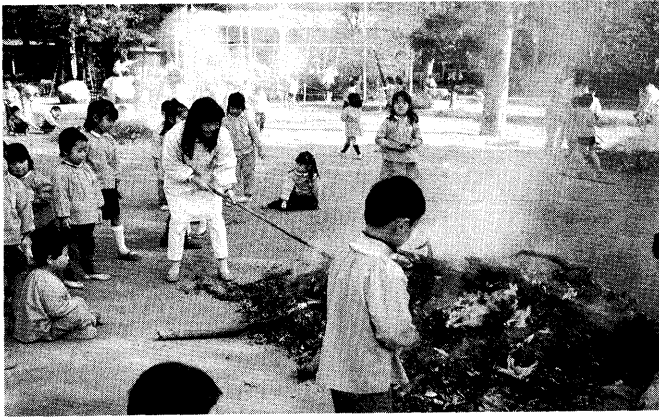
七月、園庭の森に、クワガタ、カブト虫等の幼虫がしの季節になる。毎年誰が教えるでもなく、「先生、見て」と得意になって見せに来る。こども達の目は輝いている。年長児は親元を離れて、はじめてのお泊まり保育、幼稚園より園バスにて一時間三〇分程の栃木県の山荘に一泊し、山登りに挑戦し、夜はキャンプファイヤーで楽しむ、自立への羽ばたきである。

八月、夏期休暇中の登園日恒例のスイカ割り。右だ、左だのかけ声が飛んで、やったぞ、O君の手ごたえは十

▶九月



◀十月



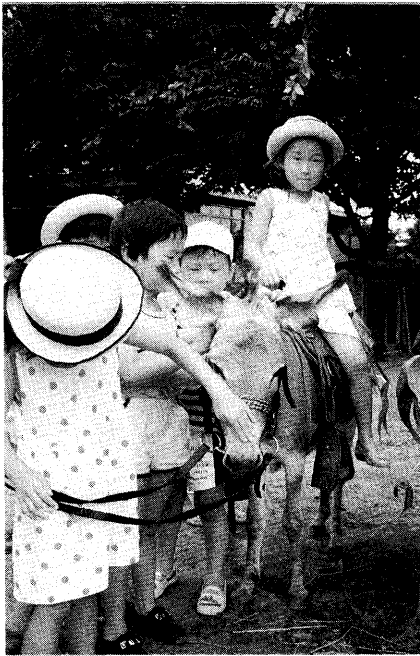
分。真っ二つに、「やったー」で満足顔。

九月、自然観察園の水辺にザリガニ釣りを楽しむ。篠竹の先に、さきイカをつけた糸を水辺に垂らすと、すぐに食いついてくる。手早い子は十五匹も釣ったことから、釣ってもケースに入れられない子、「先生入れて！取って！」と大騒ぎで全員成功の園外保育。

十月、さつま芋掘り（自然教育園にて）さつまいもは土の中になっているので、なかなか掘り出せない。小さなシャベルで一生懸命だ。やっと掘り出した時の喜びの顔。お母さんへのお土産ができて、どんなお料理で、どんな会話が弾むことだろうか。

十一月、園庭の落葉を集めて焼き芋パーティー。電子レンジや調理器具を使って焼き芋が出来る事は知っていても、落ち葉で焼き芋がつくれる事は知らないことも多し。にとって、素朴な体験は胸をわくわくさせたようだ。お芋掘りをした時の一部を残しておいた芋を、アルミホイールに包んで焚き火の中に入れ、一時間程で焼けた香ばしい焼き芋を、手を真黒にして舌つづみをうった。この豊

◀二月



かなグルメの時代にあってもこの味は抜群のようだ。

十二月、落葉した枯野の遊歩道は霜柱でさくさく、湿田には小サギが遊んで、北国からの渡り鳥の姿も多く見受けられる。タゲリ、カシラダカ、セグロセキレイ、カモ、モズ、カケス、オオタカ、など野鳥の種類は豊富で、小鳥たちのさえずりを聞きながらの散歩を楽しむ。

一月、荒川河川敷に手製のタコを持って凧上げに行くのは楽しい。子ども達が走り回るので風が無くともあがる。あがるので大はしゃぎ。教師はからだ糸の調整に大忙しである。

二月、年長児は遊歩道の散策と、ロバさんに乗って幼稚園での思い出の写真撮影の季節である。年中の時のこわごわした表情と違って笑顔の記念写真である。

三月、年中児は遊歩道と児童公園コースの園外保育だが、年長児は幼稚園思い出のお別れ遠足である。幼稚園より園バスにて四〇分程で到着できる県立子ども動物公園に行く。コアラ、恐竜、こどもの家がねらいどころ。

以上が自然志向の園外保育のあらましである。

昨年はこんな思いがけないすばらしいチャンスに恵まれた。

幼稚園の森の松の木にツミという、タカが巣を作って、ひなを育てているのが観察出来たのである。梶野鳥の会よりツミの巣作りしているとの連絡で気づいたわけである。二階園舎のベランダから九メートルの距離に巣作りして子育てが始まったのである。二羽のひな鳥に親鳥がスズメらしき小鳥を運んで来ては与えて、遠く、近くで見守っている姿が観察できたのです。このことは七月六日、朝日新聞にも掲載されましたし、七月二十五日TBSテレビポート6時で放映されましたが、こども達には、テレビ局の問いに、怪獣みたい、と答えて、観察している様子が放映され、「みえた、みえた」の大騒ぎもツミは気にもせず、日増に行動範囲を広げて飛び移る様子が、しばらくの間観察出来ました。八月に入ってからは、その姿も見えませんでした。きつと高い大空に元氣よく羽ばたいて行ってくれたことでしょう。

ツミというタカは日本で最小のタカで生態系の頂点に

あるツミがいるということは他の小動物もいるという事を意味し、森が都市化して少なくなっている中で極めて貴重なことといわれている。又今年の夏も巣作りしてくればと期待しているこの頃である。

みどりはこどもの健全な感性の発達に欠かすことの出来ない要素であり、良い自然景観はこどもの美的感覚を培い、心に豊かさややすらぎを与え、人間性の回復と健康を促進するということである。

しかし、世界的規模では多くの国々で大変な勢いで都市化が進み、砂漠化や酸性雨などによって緑が失われているという。緑や環境の問題について、二十一世紀への豊かで潤いのある社会を形成していくための人と自然が共に生きる「ふるさと」が求められているのである。

この度、「木と森の文化史」(筒井迪夫著)に「度十公園林」宮澤賢治作が掲載されておりましたが、私は文中の度十こそ現代の緑の復興を唱った先覚者ではないかと感動せずには居られません。虐げられた度十青年が自然を愛し、後世に語り伝えられる森を残してくれた

事は、正に人は唯、賢いか、賢くないか、この人の世に「だめな子はいない」と一人ひとりの生命の尊厳を覚えずにはおられなかったのである。

それらの概略を記してみると、

宮沢賢治は明治二十九年（一八九六）に岩手県に生まれ、詩人、農業技師、農村指導者、童話作家等として多方面に活躍した。しかし、その労苦の多くは報われぬま病を得、昭和八年（一九三三）三十七年の生涯を閉じた。

「度十公園林」は彼の死後に発表された多くの童話の中の一つである。

度十という「いつも縄の帯をしめて笑っている男がいる。鳥が空高く飛ぶのや、ブナの葉が光るのがうれしくてならないが、子供らにあまりばかにされるので、笑わないふりをしている。そんな男が、たった一度、親に杉の苗木をねだり、それを一生懸命に植えた。森づくりの技術には全くうかつたが、心からスギが好きでよく世話をし、成長を見守り続けた。瘦た土地なので木の成

長はよくなかったものの、度十が丹精したスギ林はやがて大きくなり、近くの子供が集まって、うれしそうに遊ぶようになった。度十もそれをうれしがって眺めていた。

長い年月が経ち、成長して村を出ていった子ども一人が、若い博士として帰ってくる。

村は昔のおもかげをすっかりなくしていたが、度十の植えたスギの林だけは「すっかりもとの通り」に残って、子供たちも同じように遊んでいた。驚いた博士は、今さらながら自分たちが、かつて馬鹿にした度十がしたこと、賢さ、偉大さを感じる。そしてスギ林は、度十を記念した公園になり、昔の子供たちの寄附もあって立派な碑が建つ。度十自身は二十年も前に世を去っていたが、彼のスギ林はいつまでも残り「新しい奇麗な空気をさわやかに」はき出しながら「本当のさいわい」とは何かを、無数の人々に教えていくのである。

「木と森の文化史」より

この度、自然を愛し美しい事象に感動して豊かな心を

育てるみどりの環境づくりに些かでも報いられば幸いと柳瀬学園の卒園児に座右の銘として「度十公園林」を贈り、この物語を賛え広めるために自主出版しました。

当幼稚園の自然教育園には海外研修旅行の記念に採集した、パリ・ベルサイユ宮殿庭園のマロニエ、アメリカ・セントラルパークの菩提樹、ボストン大学のオーク、ニュージーランドのピンオーク等の種子を蒔いて成長したものの外に、東京大学小石川植物園、山中寅文先生より贈られた数多くの樹種が栽植しており、将来、「北百度十公園林」と命名出来る日を楽しみにして居る日頃である。

(北本みなみ幼稚園)

